NACSIS-ILL の利用とユーザー会

川崎 かおる*

岩手医科大学附属図書館

Kawasaki K. (Iwate Medical University Library. 19-1, Uchimaru, Morioka 020, Japan) : Make Use of NACSIS-ILL and User Group. *Igaku Toshokan* 1997 ; 44(3) : 364-368.

The "NACSIS-ILL User Group" was organized in 1994 for the purpose of simplifying the complicated procedure for paying ILL photocopy charges by settling offset accounts twice a year. This makes the ILL accounting work of each group library much easier. However, this is only part of the ILL network. Burdensome work will continue until all libraries join the network and simplify the accounting system. If the ILL system is standardized to online only, librarians' work will decrease. Because the Iwate Medical University Library joined the NACSIS-ILL system and User Group at the beginning, the process and effective result are described.

I. はじめに

今日の図書館サービスにとって、ネットワークは欠くべからざるキーワードといえよう。めまぐるしい情報社会の中で、今やネットワークと無縁の図書館は機能を果たせないといっても過言ではない。特に、情報量と速報性が命である医学図書館においては、ネットワークの充実はそのままサービスの充実につながるものである。

本学では、相互貸借業務においてNACSIS-ILL, JMLAをはじめとするネットワークを利用している。今回は、主としてNACSIS-ILL, その中でも「文献複写料金相殺のためのNACSIS-ILLユーザー会」(以下はユーザー会と省略)の利用について事例を報告する。

II. 岩手医科大学附属図書館の概要

岩手医科大学は私立で、医学部、歯学部、薬学部の2学部を併設している。1997年4月時点での蔵書数は、図書が236,147冊、雑誌4,251種、現行継続購入誌1,890タイトルで、今年度の図書予算は7,200万円となっている。人員はフロアごとに担当が分かれており、本館1階が事務室長と庶務担当の2名、2階受入目録係が4名、3階運用係が臨時職員2名を含む5名、さらに教養部分館に2名の計13名で構成されている。そのうち相互貸借係は司書1名、臨時職員1名の計2名で、貸し借り各1名ずつで担当している。年間の処理件数は、ここ3年間の平均で、概算で受付が約5,200件、依頼が約3,200件となっている。

III. NACSIS-ILL

NACSIS-ILLは、周知のとおり1992年4月に稼働した学術情報センターのILLサービスであり、本学では稼働当初より利用している。

*Kaoru KAWASAKI : 〒020 盛岡市内丸19-1.

(1997年7月7日 受理)

NACSIS-ILL 業務の作業を簡単なフローチャートに表すと、図1のようになる。従来の FAX 申し込みと比べると、書誌事項の確認後、すぐ端末の前に座り、NACSIS-CAT で所蔵を確認し、そのまま申し込みができる。そのため、所蔵のない館に申し込むという間違いもなく、業務にかかる時間も手間も減ることが最大の利点といえる。また、相手館のユーティリティーを画面で確認できることは、支払方法や FAX 送付が可能かどうかなどのこまかい事柄まで一目でわかり、大変便利である。休館通知も、ユーティリティー画面で前日に受付不可の設定をし、コメントを入力してお

けば、誤って申し込みがくる心配もない。また、クレームなどの連絡が、電話ではなく画面上でやり取りできるので、番号を調べ、電話を入れる手間や、相手の都合にあわせる時間的なロスもなくなる。相互貸借担当者は特に席を外すことが多く、1回の電話で用が足りないということがありがちなので、この点も非常に助かっている。

もう一つ重要なことは、NACSIS-ILL が、国立大学の相互貸借業務の主要部分を占めているという点である。国立大学はセンター館をはじめとして所蔵の幅が広く、相互協力ネットワークにおける立場は重要である。よって、利用者のニーズに比例して、NACSIS-ILL の必要性も高まっていくと考えられる。現在では NACSIS-ILL 以外の手段では受け付けない機関もあり、本学のように近隣に医科系図書館の少ない環境では、必須アイテムといえよう。

IV. ユーザー会

ユーザー会は裏田（慈恵医大）、山口（東邦大）の提唱で、繁雑な支払い業務を少しでも楽にするとの趣旨で 1994 年 10 月に発足した。当初は NACSIS-ILL に参加していた公立、私立の JMLA 加盟館 7 館のうち 6 館間で実施された。内容は、ほぼ毎週行われている文献複写料金の精算、送金業務を年 2 回 4 月と 10 月に一括して相殺するというもので、明細は学術情報センターより出力、送付される。依頼館側からの一連の流れでいえば、以下のようなになる。

1. NACSIS-ILL で申し込み、複写物が届いたら到着処理をする。
2. 相手館別に通知書を分類し保管する。
3. 4 月と 10 月に明細書が届いたら通知書と照合する。
4. 差引額がマイナスであれば送金処理をする。相互貸借料金の相殺制度は、国立大学間ではす

図1. NACSIS-ILL のフローチャート

で行われていたが、私立、公立機関で初めて取り入れたのがユーザー会である。国立大学間での導入後にメリットも確認したうえでの実施ということもあり、経過は順調であるといえよう。

また、ユーザー会では、現物貸借料金についても、1996年10月より、従来どおり1件ごとの決済または相殺の二者択一を可能とした。これは、まだ国立大学間でも導入されておらず、独自の展開の第一歩である。

V. ユーザー会のメリット

ユーザー会加入に伴うメリットとしては、以下の点が挙げられる。

1. 導入の目的でもある支払業務の軽減化。
2. 出入金の間違いがなくなった。
3. 相互貸借のネットワークが広がった。
4. どこにどれくらい申し込み、受け付けているかというユーザー館同士の相互協力の分布が半期ごとに明確に現れる。
5. 送金にかかる手数料を一括、しかも相殺することによる経費の節減。

デメリットは現時点では考えにくいですが、強いていえば、期末ごとの会計処理が週ごとの場合より多い件数、金額になってしまうということであろう。本学の場合、現時点ではさほど負担にはなっていない。

VI. 今後の課題

今後の課題としては、ユーザーからの要望というかたちで、2, 3表しておきたい。

まず、ユーザー会を含めたNACSIS-ILLの課題として、参加館の確保が挙げられる。どのネットワークでも、その中だけですべての用が足りるということはいえないだろう。しかし、日常の相互貸借業務の窓口が一本化できることが理想的

といえる。現在のFAX、はがき、NACSIS-ILLの3本立てを統一することができれば、担当者の負担は相当軽減できる。少なくともタイプライター、机、端末と申し込み方法に応じて移動を繰り返す必要はなくなるのである。

また、NACSIS-ILLについては、所蔵調査、書誌確認、処理状況の確認などの照会ができる、電子メールのようなシステムがあれば、より便利になると思う。

ユーザー会としては、総会の開催もなかなか難しい状況で、参加館の間での連絡のとり方が今後の課題となろう。6機関7参加組織から始まった試みも、1997年4月現在で25機関27参加組織となり、着実に増えていることは頼もしい限りだが、大所帯になればそれだけ運営上の問題も出てくることが懸念される。昨年末から速報性や経費節減を考え、電子メールでの連絡体制の準備が進められているが、統一には至っていない。準じて、今年の秋でユーザー会発足からまる3年だが、事務局のほうは幹事館に一任され、労力も連絡等の通信費も幹事館の負担になってしまっている。幹事館の持ち回りや分担など、早急に考えなければならない問題である。

また、私立、公立機関のみのネットワークとして、このまま国立機関とは平行線をたどっていくのかどうかも不安なところである。ユーザー会の実施当初も、将来的には国立機関とも合併したネットワークとして相殺制度を行いたいとの文部省および学術情報センターの意向はあったが、国立大学の文献複写料金徴収猶予許可制度が、今年ようやく番号の統一化を行ったばかりである。以前に比べれば格段の進歩であるが、他方、まだまだ遠い道のりを思わざるを得ない。

VII. 本学での経過

以上のように、課題もあるが、結論からいえば、

本学では、ユーザー会も含め、NACSIS-ILL への加入は業務上プラスになっている。本学の事例から考察するに、NACSIS-ILL を導入した場合の作業はそれほど煩雑にはならないと思われる。それに見合うだけの作業の簡便化が確かにあるし、それ以上の前述したメリットがある。受付件数の増加は、各館違うので何ともいえないが、確かに参加すれば処理件数が増える館もあろう。しかし、現状では劇的な増加があることは考えにくい。本学の平成2年度から平成8年度までの相互貸借依頼業務の処理件数を見ると NACSIS-ILL 導入の平成4年度から平成5年度では、総数は1.5倍と増え、NACSIS-ILL での依頼は3倍弱と増えてい

る。ユーザー会が発足した平成6年度から7年度は総数が1.1倍、NACSIS-ILL が1.6倍となっている(図2)。

受け付け業務のほうは、平成4年度から5年度が総数1.6倍、NACSIS-ILL 2.7倍、平成6年度から7年度が、総数1.1倍、NACSIS-ILL が1.7倍という伸び率になっている(図3)。

確かに年々件数は増加しているが、平成4年度、平成6年度の件数を見ても、ネットワークへの参加が原因で件数が急増したとは考えにくい。

VIII. 結 語

JMLA の加盟館のなかでは、NACSIS-ILL は少しずつ増えているとはいえ、まだ普及しているとはいえない状況にある。不参加の理由は様々だが、今以上の受付件数の増加や作業の煩雑化を心配する声をよく耳にする。このことは、他のネットワークの導入、たとえばインターネット上へのOPACの公開や、ホームページの公開についても共通の懸念である。申込業務を主として考えれば、情報や手段が多ければ多いほど助かる。一方、受付業務を考えれば、情報を広範囲に送れば送るほど、申し込みが増加するのではないかという懸念がある。

互惠互助という基本理念が守られるのは、貸し出しと借用が均衡するところだけというのが現状である。大規模館や融通の利く館ほど負担が大きくなっている。しかし、肝心の蔵書の豊富な、すなわち受付件数の多い館が加わらないネットワークでは十分な活動はありえない。

日本の場合、私立、公立、国立の各図書館は資源や運営方針もまちまちで足並みをそろえることは非常に困難である。しかし、相互協力の原点であるモラルを守りきれない現時点では、具体的な対策を早急に講じる必要がある。

イギリスでは利用頻度の高い資料を集めた相互

図2. 相互貸借依頼件数

図3. 相互貸借受付件数

協力のための貸し出し専用図書館を作り、ネットワークの中心に据えるというようなシステムも考えられている。また、OCLCでは目録作業を分担するなどの業務の相互協力を行っている。参考にするべき点は多い。

これからの図書館サービスには、既存の図書館協力ネットワークに加えて、コンピュータネットワークが重要な位置を占めることになる。今後、資料の電子化が進み、相互協力のネットワークも、OCLCのように世界規模での体制が必要になってくることが考えられる。

まず、JMLAのネットワークがOnline上で実現されることが望まれる。今後、NACSIS-ILLならびにユーザー会の参加館が増え、より活発な活

動ができることを切望する。

本稿の一部は、平成9年5月旭川で開催された第68回日本医学図書館協会総会司書会議において、「ネットワークを利用した図書館サービス」として事例報告したものである。

参考文献

- 1) 広場/NACSIS-ILLを利用して. 医学図書館 1995; 42(2): 126-33.
- 2) 山田知子, 北川正路. NACSIS-ILL利用の現状と今後: 東京慈恵会医科大学医学情報センターの事例. 医学図書館 1996; 43(1): 65-8.
- 3) 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編. 図書館ハンドブック 第5版. 東京: 日本図書館協会, 1990.